

日本語母語話者は接触場面において どのように一発話を調整するか

—母語話者の一発話の「長さ」と「話者交替」に着目して—

雷 雲 恵

On Length and Construction of Single Utterance Adjustments by Native Japanese Speakers

LEI, Yunhui

本文以无日语教学经验的日语母语者（NS）与非日语母语者（NNS）为调查对象，通过对比分析与NNS接触经验多寡不同的NS在对上级场面和对初中级场面中，NS的一句话的长度和话轮转换的异同，阐明NS的接触经验和NNS的日语能力对NS句子调整产生的影响。

结果如下：首先，关于一句话的长度，接触经验多的NS比经验少的NS句子更长，且在对上级场面中使用长句，在对初中级场面中使用短句。接触经验少的NS的句子长度平均，不会根据NNS的日语能力发生变化。其次，关于一句话中的话轮转换，接触经验多的NS一句话中的平均TCU数比接触经验少的NS多，但都未能根据NNS的日语能力发生变化。但接触经验多的NS话轮转换的方式在对上级场面中，“被动型”较多，在对初中级场面中，“主动型”更多。且通过观察实例发现，接触经验多的NS在对上级场面中会一口气将长句说到最后，但在对初中级场面中会主动断句，通过增加句中的停顿给予对方足够的反应时间，且能根据对方的反应及时地进行修复。而接触经验少的NS一句话中的平均TCU数比接触经验多的NS少，且无论对方的日语能力高低，一句话中的平均TCU数和话轮转换都未发现明显变化。

综上所述，随着NS与NNS日常生活中的接触经验的增多，NS能够更灵活有效地根据NNS的日语能力进行句子调整。

1. はじめに

現在、日本においては、在留外国人の数が増えており、法務省の出入国在留管理庁の統計¹によると、2020年末現在における在留外国人数は288万7,116人であり、総人口に占める割合は、2.3%となっている。また、2009年に国立国語研究所が行った定住外国人を対象とする「生活のための日本語」の全国調査²では、日常生活に使う言語として「日本語」は61.7%であることを示しており、定住外国人は、日常的なコミュニケーションで日本語を最もよく使用していることがわかる。そのような日本社会を背景として、2006年に総務省が「地域における多文化共生推進プラン」³を策定し、それに応じて各地域においては在留外国人向けの生活・災害情報伝達やコミュニケーション支援など様々な支援が行われてきた。例えば、日本放送協会（NHK）が外国人に情報伝達するためにわかりやすい言葉でニュースを伝えるウェブサイト、「やさしい日本語で書いたニュース・NEWS WEB EASY」⁴が開設された。また、地域社会において外国人住民向けのボランティア日本語教室が開講され、言葉のために不自由を感じている外国人住民に対する語学支援が行われている。しかし、それらの支援に関して、柳田（2015）は、「外国人に対する日本語学習支援は盛り込まれているものの、身近な外国人との意思疎通に困難を抱える日本人への対応は遅れている」（p.3）と述べている。つまり、現在の日本社会においては、外国人に対する支援はごく一部の

1 出入国在留管理庁の報道発表資料「令和2年末現在における在留外国人数について」（発表日：2021/03/31、http://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00014.html、閲覧日：2021/9/10）

2 国立国語研究所（2009）「『生活のための日本語：全国調査』結果報告」（<https://www2.ninjal.ac.jp/past-projects/nihongo-syllabus/research.html>、閲覧日：2021/9/10）。

3 文化庁（2016）「地域における日本語教育の推進に向けて：地域における日本語教育の実施体制及び日本語教育に関する調査の共通利用項目について」（https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/hokoku_160229.pdf、閲覧日：2021/9/10）

4 日本放送協会（NHK）の「やさしい日本語で書いたニュース・NEWS WEB EASY」（<https://www3.nhk.or.jp/news/easy/>、閲覧日：2021/9/10）

日本語教師、ボランティアなどの日本語教育の関係者によるものが多いと考えられる。多文化共生社会を実現するには、日本語を学習する日本語学習者と、日本語教育の関係者の力だけでは十分ではない。外国人と最も身近に接している、日本語教育経験のない一般の日本語母語話者も多文化共生を実現させていくための当事者であり、一般の日本語母語話者が直面する問題も重要視されなければならない。

会話においては、会話参加者が発話を用いてコミュニケーションを行っており、お互いの情報共有のためには、一つ一つの発話が媒体として利用され、それらの発話は、人間関係、場面などによってさまざまな調整が行われている。日本語母語話者 (Native Speaker : NS) と日本語非母語話者 (Non Native Speaker : NNS) が日本語を用いてコミュニケーションを取る接触場面において、NSが自らの発話を様々な形で調整するコミュニケーション・ストラテジーは、従来「フォリナー・トーク」という枠組みの中で研究がなされてきた。その中で、スクータリデス (1981) は日本語にも見られる普遍的なフォリナー・トークの特徴として「文法的には正しいが、非常に短い文」ということを挙げている。ロング (1992) は「短い文の頻用」を日本語における対外国人言語行動の一つとして扱っている。このことから、接触場面におけるNSの発話調整は、まずNSの一発話の「長さ」に密接に関わっていると思われる。

一方で、会話が行われる時は、サックス他 (2010) が述べるように、会話参加者の間で発話の順番が何らかの方法によって交替し、コミュニケーションが円滑に行われている。接触場面においてNSがどのように発話を調整するかを解明するためには、NSの一発話の「長さ」だけではなく、NSの一発話における「話者交替」、すなわち一発話の中で何が行われているのか、把握することも重要になると考える。接触場面は、

母語場面と比べると、会話参加者間の言語能力や既有知識などに大きな差があるため、NSが自らの一発話を適切に調整することはNNSの理解促進にも繋がると考えられる。

そこで、本稿では、日本語教育経験のない一般のNSの接触場面における一発話に注目し、NSがどのように一発話の「長さ」を調整し、その一発話における「話者交替」はどのように行われているか、明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究と研究課題

2-1 先行研究のまとめ及び問題の所在

接触場面におけるNSの「一発話」の調整に注目する先行研究として、早川（2001）、柳田（2010）、小松（2015）が挙げられる。

早川（2001）は、日本語教育の経験者（10年以上の日本語教師）と実習生（学部生）を対象として、日本語教育実習が行われている教室談話（経験者約270分、実習者約270分）を収録した。経験者と実習生の発話量、速度、「間」、及び質問から解答までのインターアクションの数を比較して、分析を行った。その結果、実習生と比べて経験者の発話は、拍数が多く、速度が速く、「間」をおかず、学生の解答を引き出すためのインターアクションが多いことがわかった。ここでは、日本語教師の発話調整に影響を与える要因として、NSの長年の日本語教育経験が指摘されているが、日本語教育経験を持たない一般のNSは調査対象とされていない。

また、柳田（2010）は、一般のNSを調査対象として、接触場面におけるNSの発話にNNSとの接触経験が与える影響について詳しく検討している。接触経験の多いNS 10名と接触経験の少ないNS 10名による中上級NNSとの「情報やり場面」に着目し、NSの発話を「節単位

(Clause Unit)』⁵という文の構成単位によって「強境界」⁶と「文単位」⁷に分類し、発話量を集計している。その結果、接触経験の少ないNSと比べると、接触経験の多いNSの方が、情報の切れ目が明確な「文単位」の発話を多く用いていることがわかった。このことから、NSのNNSとの接触経験の多寡が、接触場面におけるNSの発話調整に影響を与えていることを明らかにした。柳田(2010)では、NSの発話に注目しているため、NSの接触経験という属性は考慮されているが、もう一方の会話参加者であるNNSの日本語能力の違いは考慮されていない。

さらに、小松(2015)は、超上級接触場面と中級接触場面におけるNSとNNSの発話の長さを比較している。韓国語を母語とする女性の超上級NNS 14名、中級NNS 14名を調査対象として、超上級接触場面14組と中級接触場面14組における会話参加者の一発話の長さを比較して分析した。その結果、超上級接触場面では、NNSとNSの一発話の長さが類似しているのに対して、中級接触場面ではNNSよりNSの一発話が長いことを明らかにしている。小松(2015)は、NSの一発話の長さ⁸が、中級接触場面上と上級接触場面でどのような違いがあるか、NSはNNSの日本語能力に応じてどのように調整しているかについては考察されていない。

5 柳田(2010)は文の単位を認定するに当たって、丸山他(2006)の「節単位」を利用した。丸山他(2006)は、節単位(Clause Unit)とは、「話し言葉における『文』に相当する単位として、係り受け構造情報、重要文情報、談話境界情報など構文・談話レベルの情報を付与するための基本単位として想定された、文法的・意味的なまとまりを備えた言語的単位」(p.263)であるとしている。

6 丸山他(2006)は、従属節をもとに、節境界を切れ目の強弱によって「絶対境界」、「強境界」、「弱境界」の3つに分類している。「絶対境界」とは文末表現に相当する境界である。「強境界」とは南(1974)のいうC類の従属節にほぼ相当するもので、いわゆる文末表現ではないが、構造的大きな切れ目を成すと考えられる節境界であり、「並列節ガ」や「並列節ケレドモ」などがこれに相当する。「弱境界」とは通常は発話の切れ目になることはないが、稀に発話の切れ目になり得る従属節の境界であり、「理由節ノデ」や「条件節タラ」などがこれに相当するとしている(p.267)。

7 小磯(2008)は、丸山他(2006)の節単位を利用して、「絶対境界」、「体言止め」、「と文末」(文末表現+「と」)、「文末候補」(文末表現+終助詞など)で区切られる単位を統語的な「文単位」とみなしている。

一方、坂本他（1989）は、NNS側から捉えたフォリナー・トークについて興味深い調査結果を報告している。坂本他（1989）は、英語圏の初級から準上級までのNNS 82名を対象に、母語場面の会話と接触場面の会話を被験者に聞かせ、フォリナー・トークに対するNNSの好感度を調べた。その結果、NNSの言語能力が高ければ高いほど、フォリナー・トークの特徴としての「ゆっくり話す」、「短文を並べる」に対する好感度が低くなることがわかった。このことから、接触場面におけるNSの一発話の調整に関して、NNSの日本語能力に合わせて調整する必要があることが窺える。

2-2 研究課題

本稿は、日本語教育経験を持たない一般のNSを調査対象として、接触場面におけるNSの一発話に、NSのNNSとの日常的な接触経験とNNSの日本語能力がどのような影響を及ぼしているかを明らかにするために、NSの一発話の「長さ」と「話者交替」に注目して分析を行う。研究課題として以下の2点を設定する。

- (1) NSの接触経験とNNSの日本語能力は、NSの一発話の「長さ」にどのような影響を及ぼしているか。
- (2) NSの接触経験とNNSの日本語能力は、NSの一発話における「話者交替」にどのような影響を及ぼしているか。

3. 調査概要

3-1 調査時期及び調査対象

本調査⁸は2018年4月から2020年1月にかけて行った。調査対象は20

⁸ この調査の実施とデータの収集については文教大学文学部・言語文化研究科研究倫理審査委員会の承認を得ている。

代前半を中心とした女性の大学生及び大学院生とし、調査協力者の性別、年齢、親疎関係などの属性を統一した。また、一般のNSに注目することから、日本語教育経験のあるNSを除外した。

NSは、接触経験の多いNS 6名（以下ではNSE1～NSE6）、接触経験の少ないNS 6名（以下ではNSN1～NSN6）の計12名である。柳田（2015）の判定基準を援用し、「接触経験が多い」と判定したのは、普段から外国人と日本語で話す経験があり、その頻度が週に1回以上で毎回の発話量が十分にあり、さらに普段日本語で話す親しい外国人の友人がいると回答したNSである。「接触経験が少ない」と判定したのは、日本語による外国人との会話経験がほとんどなく、日本語で話す親しい友人がいないと回答したNSである。NSのインフォーマント情報を表1に示す。

表1 NSのインフォーマント情報

	性別	年齢	出身地	外国人と日本語で話す経験		日本語で話す外国人の親しい友達
				頻度	発話量	
NSE1	女	20	群馬県	ほぼ毎日	多い	いる
NSE2	女	20	埼玉県	週に1～2回	多い	いる
NSE3	女	24	福島県	週に3～4回	多い	いる
NSE4	女	20	埼玉県	週に1～2回	多い	いる
NSE5	女	22	群馬県	週に1～2回	多い	いる
NSE6	女	21	埼玉県	週に3～4回	多い	いる
NSN1	女	20	埼玉県	ほとんどなし	なし	いない
NSN2	女	21	埼玉県	ほとんどなし	なし	いない
NSN3	女	20	栃木県	ほとんどなし	なし	いない
NSN4	女	22	宮城県	ほとんどなし	なし	いない
NSN5	女	23	千葉県	ほとんどなし	なし	いない
NSN6	女	19	千葉県	ほとんどなし	なし	いない

NNSは、上級NNS 12名（以下ではNNSA～NNSL）、初中級NNS 12名（以下ではNNSa～NNSl）の計24名である。NNSの日本語能力については、学習歴、滞日歴、日本語能力試験の資格の3点から判定した。上級NNSと判定したのは、日本語学習時間が800時間以上で来日して2年以上、日本語能力試験N1合格あるいはN1に相当する能力が認められるNNS⁹である。また、初中級NNSと判定したのは、来日して約1年、日本語学習時間が300時間から600時間で、日本語能力試験N3合格あるいはN3に相当する能力が認められるNNS¹⁰である。NNSのインフォーマント情報を表2に示す。

表2 NNSのインフォーマント情報

		性別	年齢	国籍・地域	母語	日本語 学習歴	日本 滞在歴	日本語 能力
上級 NNS	NNSA	女	26	中国	中国語	4年6ヶ月	3年	N1合格
	NNSB	女	24	中国	中国語	4年6ヶ月	3年7ヶ月	N1合格
	NNSC	女	26	中国	中国語	4年8ヶ月	2年9ヶ月	N1合格
	NNSD	女	22	マレーシア	マレー語	5年	4年3ヶ月	N2合格
	NNSE	女	22	中国	中国語	4年	2年6ヶ月	N1合格
	NNSF	女	25	中国	中国語	5年	3年1ヶ月	N1合格
	NNSG	女	25	中国	中国語	6年	3年2ヶ月	N1合格
	NNSH	女	32	中国	中国語	4年	5年3ヶ月	N1合格
	NNSI	女	26	中国	中国語	5年9ヶ月	2年5ヶ月	N1合格
	NNSJ	女	30	中国	中国語	5年6ヶ月	2年	N1合格
	NNSK	女	27	中国	モンゴル語	3年6ヶ月	5年7ヶ月	N1合格
	NNSL	女	27	中国	中国語	6年9ヶ月	2年10ヶ月	N1合格

⁹ N1未受験である者（NNSD）については、授業を担当する日本語教員に判断してもらい、上級と判定した。

¹⁰ N3不合格者（NNSb、NNSc、NNSe、NNSk）、N3未受験者（NNSh、NNSi、NNSj）、N4合格者（NNSl）については、それぞれの学習歴、滞日歴を確認したうえで、授業を担当する日本語教員に判断してもらい、初中級と判定した。NNSIは滞日歴が5年間であるが、家族滞在で来日し、普段の日本語の使用が少ないということが分かったため、初中級NNSとして扱った。

日本語母語話者は接触場面においてどのように一発話を調整するか

		性別	年齢	国籍・地域	母語	日本語 学習歴	日本 滞在歴	日本語 能力
初中級 NNS	NNSa	女	20	中国	中国語	3年1ヶ月	1年	N3合格
	NNSb	女	21	中国	中国語 (広東語)	2年1ヶ月	1年6ヶ月	N3不合格
	NNSc	女	23	中国	モンゴル語	7ヶ月	2ヶ月	N3不合格
	NNSd	女	17	中国	中国語	2年6ヶ月	1年2ヶ月	N3合格
	NNSe	女	24	ベトナム	ベトナム語	10ヶ月	4ヶ月	N3不合格
	NNSf	女	21	台湾	中国語	1年2ヶ月	1年2ヶ月	N3合格
	NNSg	女	22	インドネシア	インドネシア語	3年1ヶ月	1ヶ月	N3合格
	NNSh	女	27	ドイツ	ドイツ語	2年6ヶ月	2ヶ月	未受験
	NNSi	女	19	中国	中国語	3年2ヶ月	3ヶ月	未受験
	NNSj	女	21	ニュージーランド	英語	3年3ヶ月	3ヶ月	未受験
	NNSk	女	25	台湾	中国語	9ヶ月	1年2ヶ月	N3不合格
	NNSl	女	36	スリランカ	シンハラ語	2年	5年	N4合格

3-2 調査方法

本調査は、NSとNNSとの初対面場面を設定し、ロールプレイ方式を採用した。ロールプレイの内容は、NNSが学校の休みを利用して日本観光をしたいと考え、日本人の友人NSに相談しながら二人で行先を決めるというものである。

次に調査の手順を示す。調査前に約10分間雑談してもらった後、調査者は、ロールカードと旅行パンフレットを2人に渡し、ロールプレイの内容と会話時間を説明して退室した。約10分間のロールプレイが終了した後、調査者が入室してそれぞれの調査協力者にフォローアップ・インタビューを行い、会話に対する理解度や評価を確認した。

接触経験の多いNS 6名と接触経験の少ないNS 6名それぞれに、上級NNS、初中級NNSと2人1組でロールプレイを行ってもらった。接触経験の多いNSの対上級場面が6組、対初中級場面が6組、接触経験の少ないNSの対上級場面が6組、対初中級場面が6組、合計24組、約

240分のロールプレイ会話を録音し、文字化して分析した。文字化の方法は宇佐美（2015）に従った。

4. 調査結果

4-1 一発話の認定

会話における一発話の認定については、宇佐美（2015）が、「実際の会話の中で発話された文」（p.2）という意味で「発話文」という用語を使用している。文を成していると捉えられる一人の話者による発話を「一発話文」と認定し、「話者交替」、「間」という2つの要素が重要になることを指摘している。本稿では、「一発話の認定」を宇佐美（2015）の「一発話文の認定」に従う。以下では、宇佐美（2015）の認定方法に基づき、本談話資料から抜き出したNSの発話例を用いて説明する。

① 1語の発話

104 NNSk 遊園地？。

→105 NSE6 遊園地。

106 NNSk ああ、遊園地、東京は（うん）、ディズニーランドとほかの人、あっほか、ほかのところは…。

② 文末が省略された形で言い切られた発話

→176 NSE1 後、なんか、煙とかをこうやって浴びるみたいな。

177 NNSA あれ、はい。

③ 話者が自分で発話の最後まで言い切らず言い淀んだ発話

→155 NSN3 [パンフレットの写真を指しながら] こういうところにあるんですけど、それがすごい幻想的で…。

日本語母語話者は接触場面においてどのように一発話を調整するか

156 NNSF へえー、なんか、どこで見たことがある。

- ④ 第1話者の発話が完結する前に、途中で挿入される形で、第2話者の発話が始まり、結果的に終了した発話。234の発話により233の発話が最後まで言い切れなかった。

→233 NSE3 北海<道だと> {<} 【。

234 NNSE 】 <やっぱり> {>} 飛行機ですかね。

- ⑤ 前後に間があり、一発話とみなされるあいづちや笑い。

262 NNSI <笑い>オッケー、こっこれいい（うん）ところです。

→263 NSE5 <笑い>。

264 NNSI えっじゃあ、あのう、えー、おいしい食べ物ありますか？群馬県で。

- ⑥ 構造的には文になっているが、独立した一発話とはみなさず、その先行部・後続部とまとめて一発話とするもの：フィラーの場合（以下の下線部）。

→65-1 NSN6 そうですね、けっこうやっぱり（はい）、今住んでる埼玉とか東京とかの付近はけっこう、マンションとか（はい）、<住宅とか> {<},,

66 NNSL <そうですね> {>}。

65-2 NSN6 自然ってゆう感じじゃないですよ、あんまり。

- ⑦ 構造的には文になっているが、独立した一発話とはみなさず、その先行部・後続部とまとめて一発話とするもの：直接引用を含む

発話の場合（以下の下線部）。

→101 NSE3 だから、渋谷の、あのう、交差点を見たときは、
“人がいっぱいいる”、<怖い> |<|。

102 NNSe <ああ、そうですか> |>|。

103 NSE3 <笑い>。

- ⑧ 一発話になりうる発話が間を入れずに繰り返されているために、それらをまとめて一発話とみなすもの。

205 NNSI えっ [紙の上で書きながら] これですかね。

→206 NSE5 あっそうですそうです<そうです> |<|。

- ⑨ 発話が一息に続いているため、一発話と認められ、結果的に倒置の形になっているもの。

→348 NSE5 <群馬> |>| 県、うどんおいしいです、意外と。

349 NNSI ああ、<群馬県> |<|。

- ⑩ 話者が一旦交替しても、同じ話者によって発せられた「一発話」とみなすもの。44-1と44-2は話の内容がまとまっているので一発話とみなす。

→44-1 NSE2 で、まあ、これは、たぶん半日ぐらいあればこの雷門とか仲見世通りってゆう有名な通りなんだけど..

45 NNSC はい。

→44-2 NSE2 浅草寺とかお寺とかも、まあ、半日あれば見えるかなあって思います。

4-2 一発話の「長さ」

一発話の「長さ」は、「モーラ数」で示すことにして、モーラ数を算出するのに、漢字仮名変換プログラム「rubyタグ（ruby要素）マークアップ」¹¹を使用した。各会話について、それぞれNSの総発話数と総モーラ数を集計し、一発話における平均モーラ数を算出した。その結果を表3と図1に示す。

表3 一発話の「長さ」

	接触経験の多いNS		接触経験の少ないNS	
	対上級場面	対初中級場面	対上級場面	対初中級場面
総発話数	830	750	674	697
総モーラ数	18059	14303	12453	13192
一発話における平均モーラ数	21.8	19.1	18.5	18.9

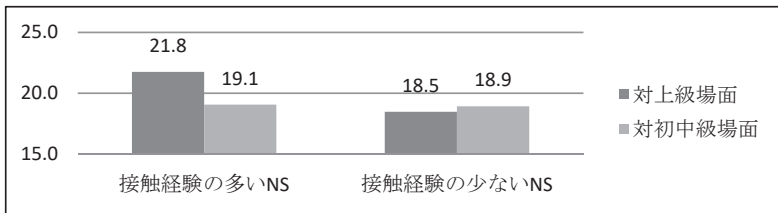


図1 一発話における平均モーラ数

まず、全体から見ると、対上級場面でも対初中級場面でも接触経験の多いNSは、接触経験の少ないNSより一発話が長いことが示されている。次に、接触経験の異なるNSの場面ごとに結果を見ると、接触経験の多

¹¹ 漢字仮名変換プログラム「漢字カナ変換・rubyタグ（ruby要素）マークアップ」(<http://www.lsx.jp/converter/kana/index.html>、利用日：2021/06/20)。

いNSは一発話における平均モーラ数が、対上級場面で21.8モーラ、対初中級場面では19.1モーラを使用している。両場面について t 検定を行った結果、両場面の間で有意な差が見られた ($t=2.183, p<.05$)。つまり、接触経験の多いNSは、初中級NNSに対して話すとき一発話を短くする傾向があると言える。一方、接触経験の少ないNSの一発話における平均モーラ数は、対上級場面で18.5モーラ、対初中級場面で18.9モーラである。両場面について t 検定を行ったところ、両場面の間には有意差が認められなかった ($t=-.322, n.s.$)。つまり、接触経験の少ないNSは相手のNNSの日本語能力に関係なく、一発話を一定の長さで用いていると考えられる。

大石 (1971) は、日本語は述語が文の終わりに置かれるため、文が長くなるに従ってわかりにくさの度合いが増し、特に話し言葉では文の長さが聞き手の発話理解に影響することを指摘している。接触経験の多いNSは、初中級NNSに対して一発話を短くすることがNNSの理解を促進する、という認識を持っていると考えられる。一方、坂本他 (1989) は、NNSは日本語能力が上がるにつれて「短い文」に対する好感度が低くなることを明らかにしている。このことから、接触場面におけるNSの過剰に短い一発話が必ずしも上級NNSの好感度をもたらすわけではないと言える。接触経験の多いNSが、初中級NNSに対して短い一発話を、上級NNSに対して比較的長い一発話を用いていることから、接触経験の多いNSはNNSの日本語能力に合わせて一発話の長さを調整していると考えられる。一方、接触経験の少ないNSは、相手の日本語能力にかかわらず、一発話の長さが一定であることから、NNSの日本語能力に応じて一発話の長さを調整することができていないと思われる。このことから、NSは接触経験によって、NNSの日本語能力に応じて一発話の長さの調整を学習していることが推測される。

4-3 一発話における「話者交替」

従来の研究では、「発話の構成単位」としてさまざまな言語的単位 (C-Unit、Utterance、Intonation Unit¹²など) が提唱されてきた。その中で、談話分析・会話分析の研究においてよく用いられるのは、サックス他 (2010) の提唱する1つの発話順番を構成しうる言語的単位、すなわちTCU (Turn Constructional Unit: TCU) である。サックス他 (2010) は、会話では順番交替組織が働いているとしている。順番交替組織とは、現在の話し手が、現在の順番の完了可能な場所 (移行適切場所 (Transition Relevance Place: TRP)) まで話し続ける権利を保証するものである。現在進行中の話者がTRPで次話者に発話権を移動する、すなわち「話者交替」が発生する場合、それまでの発話部分が1つの発話順番を構成するTCUである。

会話における話者交替は、基本的には文法的に一発話が完結されると思われる場所で多く発生し、一発話の中で話者交替が発生しないため、話し手の一発話は1TCUによって構成されている。その発話例を例1に示す。

例1 1TCUからなる発話

- 10 NSN5 [パンフレットの地図を指す] えっと、今いるところは埼玉県ってゆって、ここにあります。
- 11 NNSj ああ、ここ、うん。
- 12 NSN5 で、東京ととても近いです。
- 13 NNSj うんうんうん。

¹² Loban (1966) が提唱したC-Unit (Communication Unit) は、表層に現れている統語的な特徴、特に「節 (Clause)」の境界を分割位置として得られる文法的な単位 (Syntactic Unit) である。また、Crookes (1990) が提唱したUtteranceとChafe (1987) が提唱したIntonation Unitは、基本的にポーズやイントネーションなどの音声的な情報を手がかりとして発話を分割し、得られる単位である。

例1では、NSN5がNNSjに10「えっと、今いるところは埼玉県ってゆって、ここにありますが」と地図を指しながら埼玉県の位置を示している。NNSjは11で「ああ、ここ、うん」と言って理解を示したので、NSN5は12「で、東京ととても近いです」と、東京との距離を示すことによってさらに詳しく説明している。ここでは、NSN5による10と12はそれぞれ「1TCUからなる発話」である。

その一方で、会話においては、話し手の一発話の中で聞き手のあいづちや割り込みなどによって話者交替が発生し、複数のTCUにわたって一発話を完結させた場合もある。例2に発話例を示す。

例2 複数のTCUからなる発話

- 184-1 NSE2 [パンフレットの写真を指す] こういうアラビアみたいなの、こういうところもあるから、けっこう素敵なの、
- 185 NNSc はい。
- 184-2 NSE2 感じで見れるかなあって、
- 186 NNSc はい。
- 184-3 NSE2 思います。
- 187 NNSc あのう、アラビアの(うん) えっ、うーん、物語(うん)を小さい頃(うん)でも見ることもあります。

例2では、NSE2とNNScが東京ディズニーシーのアラビアンコーストについて話している。NSE2の184の発話はNNScの185「はい」と186「はい」というあいづちによって、184-1「けっこう素敵な」、184-2「感じで見れるかなあって」、184-3「思います」の3つの部分に分けられ、184-3で完結している。NSE2の184-1～184-3は一発話となり、3TCUとする。

4-3-1 一発話におけるTCU

このように、各会話には、「1TCUからなる発話」と「複数のTCUからなる発話」の存在が確認されたため、それぞれNSの総発話数と総TCU数を集計し、NSの一発話における平均TCU数を算出した。その結果を表4と図2に示す。

表4 一発話におけるTCU

	接触経験の多いNS		接触経験の少ないNS	
	対上級場面	対初中級場面	対上級場面	対初中級場面
総発話数	830	750	674	697
総TCU数	1048	930	774	781
一発話における平均TCU数	1.26	1.24	1.15	1.12

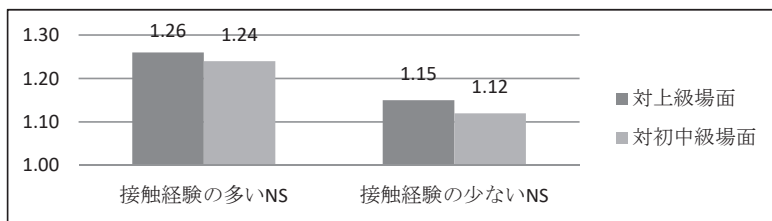


図2 一発話における平均TCU数

まず、全体から見ると、対上級場面でも対初中級場面でも接触経験の多いNSは、接触経験の少ないNSより一発話における平均TCU数が多いことが示されている。次に、接触経験の異なるNSの場面ごとに結果を見ると、接触経験の多いNSは一発話における平均TCU数が、対上級場面では1.26、対初中級場面では1.24である。両場面について t 検定を行ったところ、両場面の間には有意差が認められなかった ($t = .632, n.s.$)。

一方、接触経験の少ないNSは一発話における平均TCU数が、対上級場面では1.15、対初中級場面では1.12である。両場面について *t* 検定を行った結果、両場面の間には有意差が見られなかった ($t=1.042, n.s.$)。つまり、一発話における平均TCU数は、接触経験の多いNSも接触経験の少ないNSも相手のNNSの日本語能力による変化は見られないと言える。

4-3-2 一発話における「話者交替」の方法

次に、一発話の中で話者交替が発生するNSの「複数のTCUからなる発話」に注目し、NSの一発話における「話者交替」の方法には、NSの発話がNNSの発話と重なったために受動的に発生した「受動的話者交替」と、NSが一発話の中で「間」を置くことによって一発話を自発的に区切った「自発的話者交替」の2種類があることが確認された。例3に「受動的話者交替」の発話例を示す。

例3 受動的話者交替

- 52-1 NSN2 あ、そう、<ミッキーと> {<|,.
 53 NNSd <ミッキー> {>|、<笑い>。
 →52-2 NSN2 ミニーは、あのう、ランドにもシーにもいるんだ
 けど、たぶんダッフィーとかシェリーメイはシー、
 ディズニーシーだけのキャラクター（ああ）、みたい。

例3では、NSN2がNNSdにディズニーのキャラクターについて話している。NSN2の52の発話は52-1と52-2の2TCUによって構成されている。NSN2が52-1「あ、そう、ミッキーと」の最後の「ミッキーと」で、NNSdが53で「ミッキー」と言ったため、NSN2の「ミッキーと」と重なっている。その後、NSN2は52-2で「ミニーは、あのう、ランドにも

シーにもいるんだけど、……」と話を続けている。ここでNSN2は、自発的に自分の発話を52-1と52-2に区切って話しているわけではなく、NNSdが53「ミッキー」と重ねたために、話者交替が発生したと考えられる。このような話者交替を「受動的話者交替」とする。

次に、例4に「自発的話者交替」の発話例を示す。

例4 自発的話者交替

- 69-1 NSE4 ソラマチってゆうところには、お土産屋さんや、
70 NNSg うん。
→69-2 NSE4 食べ物屋さんや、
71 NNSg うん。
→69-3 NSE4 水族館、
72 NNSg うん。
→69-4 NSE4 があります。
73 NNSg あっそうですか。

例4は、NSE4がNNSgに東京スカイツリーの周りがあるソラマチについて説明している場面である。NSE4は69の発話を69-1～69-4までの4TCUに区切って、69-4で「があります」と一発話を完結している。NSE4が69-1「ソラマチってゆうところには、お土産屋さんや」、69-2「食べ物屋さんや」、69-3「水族館」の最後に「間」を置いて区切った後に、NNSgが70「うん」、71「うん」、72「うん」というあいづちを入れていることから、NSE4は自発的に「間」を置いて、相手の反応を確認していると考えられる。このように、発話69の中で3回発生した話者交替を「自発的話者交替」とする。

以上のように、NSの一発話における話者交替を「受動的話者交替」

と「自発的話者交替」に分類し、出現数を集計した。その結果を表5に示す。

表5 一発話における話者交替回 (%)

	接触経験の多いNS		接触経験の少ないNS	
	対上級場面	対初中級場面	対上級場面	対初中級場面
受動的話者交替	23 (10.6)	9 (5.0)	24 (24.0)	20 (24.1)
自発的話者交替	195 (89.4)	171 (95.0)	76 (76.0)	63 (75.9)
合計	218 (100)	180 (100)	100 (100)	83 (100)

表5から、接触経験の多いNSは、対上級場面では「受動的話者交替」が23回 (10.6%)、「自発的話者交替」が195回 (89.4%) であるのに対して、対初中級場面では「受動的話者交替」が9回 (5.0%)、「自発的話者交替」が171回 (95.0%) である。両場面についてカイ二乗検定を行った結果、両場面と話者交替の方法には有意な関係が見られた ($\chi^2(1) = 4.108, p < .05$)。さらに、残差分析を行った結果、接触経験の多いNSは、対上級場面では「受動的話者交替」を期待度数より多く、対初中級場面では「自発的話者交替」を期待度数より多く用いる傾向があることが示された。

一方、接触経験の少ないNSは、対上級場面では「受動的話者交替」が24回 (24.0%)、「自発的話者交替」が76回 (76.0%) であるのに対して、対初中級場面では「受動的話者交替」が20回 (24.1%)、「自発的話者交替」が63回 (75.9%) である。さらに、両場面についてカイ二乗検定を行った結果、両場面と話者交替の方法には有意な関係が見られず ($\chi^2(1) = .000, n.s.$)、接触経験の少ないNSは、対上級場面でも対初中級場面でも、一発話における話者交替の方法を区別なく用いていることが分かった。

以上の結果を踏まえ、話者交替の方法について、有意差が認められた接触経験の多いNSの一発話を観察し、質的に分析する。まず、接触経験の多いNSの対上級場面において有意に多かった「受動的話者交替」が起きた例5を挙げる。

例5 対上級場面

- 8-1 NSE2 そう、東京の、本当に日本の、栄えてるくところなんだけど> {<|,,
9 NNSC <うん、はい> |>|。
→8-2 NSE2 いろんなお店とか、このバスタ新宿って大きなところ
<とかあって> {<|,,
10 NNSC <うんうん> |>| うん。
→8-3 NSE2 ってゆうところってゆうのと、二個目のコースとしては、日本の神社に触れようってことで、浅草、なんだけど、行ったことありますか？。
11 NNSC 浅草は、行ったことあります。

例5では、NSE2がNNSCに新宿と浅草について紹介している。NSE2の8の発話は8-1～8-3の3TCUによって構成されており、一発話におけるモーラ数が140モーラである。NSE2が8-1「そう、東京の、本当に日本の、栄えてるところなんだけど」の最後の「ところなんだけど」で、NNSCが9「うん、はい」と言ったため、NSE2の「ところなんだけど」と重なっている。続いて、NSE2は8-2「いろんなお店とか、このバスタ新宿って大きなところとかあって」と新宿を紹介している途中で、NNSCが10「うんうんうん」とあいづちを打ったため、8-2の最後の「とかあって」と重なっている。その後、NSE2は8-3「ってゆうところって

ゆうのと、二個目のコースとしては、日本の神社に触れようってことで、浅草、なんだけど、行ったことありますか？」と新宿の次に浅草について紹介を始める。発話8の中でNSE2は、2回の「受動的話者交替」が発生したことがわかる。このように、NSE2では、上級NNSに対して話すときは、モーラ数140というかなり長い一発話でも区切らず、最後まで一気に話そうとしている様子が窺えた。

次に、接触経験の多いNSの対初中級場面において有意に多かった「自発的話者交替」が起きた例6を挙げる。

例6 対初中級場面

- 61-1 NSE1 夏に着るのは、
62 NNSa はあ。
→61-2 NSE1 夏に着るのは、浴衣ってゆって、
63 NNSa ああ。
→61-3 NSE1 軽い??.
64 NNSa [沈黙1秒]。
→61-4 NSE1 けっこう薄い??.
65 NNSa ああ、はい。
→61-5 NSE1 やつなの。
66 NNSa はい。

例6は、NSE1がNNSaに浴衣と着物の違いについて説明している場面である。NSE1は61の発話を61-1～61-5まで5TCUに区切って発話し、一発話におけるモーラ数が41モーラである。NSE1は61-1「夏に着るのは」と言ったところで「間」を置き、夏に着る浴衣の説明を開始する。その「間」に気づいたNNSaは62「はあ」と言ってあいづちを

打っている。NNSaの反応を得たNSE1は61-2「夏に着るのは、浴衣ってゆって」で、まず「夏に着るのは」と繰り返し、さらに「浴衣ってゆって」と言って、本題の浴衣を持ち出したあと、再び「間」を置いている。それに対してNNSaが63「ああ」とあいづちを打って理解を示したので、NSE1は61-3で「軽い??」と語尾を上げて、NNSaの反応を待っている。しかし、NNSaの1秒の沈黙があったため、NSE1はNNSaが理解していないと思い、61-4「けっこう薄い??」と言い換えている。さらに、61-4の語尾を上げることによって、NNSaの理解を確認しようとしている。NNSaが65「ああ、はい」と答えて理解を示したことから、NSE1は61-5で「やつなの」と一発話を完結させた。NSE1の発話61の中では「自発的話者交替」が4回発生している。このように、NSE1は、初中級NNSに対して話すときは、自発的に一発話を区切って「間」を置くことによって、相手の理解を確認しながら発話を進め、相手の反応によっては一発話を修復しながら進行していく様子が窺えた。

4-3-3 考察

柳田(2013)は、例6で挙げたNSE1の「夏に着るのは,」、「軽い,」、「けっこう薄い,」というような文の終わりのはっきりしない話し方は、言いたいことが分かりにくくなることを指摘している。しかし、初中級NNSは上級NNSと比べて日本語の理解語彙も使用語彙も量が小さいため、初中級NNSには一発話を区切ってNNSの理解を一つ一つ確認しながら発話を進める必要があるのではないか。接触経験の多いNSは、初中級NNSに対しては、自発的に「間」を置いて相手が理解する時間を与えて相手の理解を確認していくことが、円滑なコミュニケーションのためには有効であるという認識を持っていることが推測される。一方、上級NNSに対しては「受動的話者交替」が多く生じるのは、上級NNS

の言語能力を考慮して、必要以上に一発話を区切らないという判断の現れとも捉えられる。また、一方で、上級NNSが積極的に会話に参加して、発話順番を取得しているためとも考えられる。それに対して、接触経験の少ないNSは、相手の日本語能力によって、一発話における平均TCU数も話者交替の方法も変化が見られないことから、NNSの日本語能力に応じて一発話における話者交替を変えることに配慮していないことが窺える。以上の結果から、NSは接触経験によって、NNSの日本語能力に応じて一発話における話者交替の仕方を学習していると言える。

5. まとめと今後の課題

本稿では、接触場面において一般のNSの一発話の「長さ」と「話者交替」に、NSのNNSとの日常的な接触経験とNNSの日本語能力がどのような影響を及ぼしているか、分析した。その結果、以下のことが明らかになった。

まず、一発話の「長さ」については、接触経験の多いNSは、接触経験の少ないNSより一発話が長く、また、上級NNSに対しては長い一発話を、初中級NNSに対しては短い一発話を用いていた。一方、接触経験の少ないNSは、接触経験の多いNSより一発話が短く、NNSの日本語能力によって一発話の長さは変わらず、一定であることが分かった。

次に、NSの一発話における「話者交替」については、接触経験の多いNSは、接触経験の少ないNSより一発話における平均TCU数が多いが、相手の日本語能力によって変わることはなかった。次に、一発話における話者交替の方法に注目した結果、上級NNSには「受動的な話者交替」を、初中級NNSには「自発的な話者交替」を多く使い、相手の日本語能力に合わせて話者交替の方法を変えていた。さらに、接触経験の多いNSの一発話を観察したところ、対上級場面では、長い一発話を区切らず、最

後まで一気に話そうとしているのに対して、対初中級場面では、一発話を自発的に区切って「間」を置き、相手の反応によって一発話を修復しながら進めている様子が窺えた。一方、接触経験の少ないNSは、接触経験の多いNSより一発話における平均TCU数が少なく、相手の日本語能力によって、一発話における平均TCU数も一発話における話者交替も変化することがないことが明らかになった。接触経験の多いNSの両場面における一発話を図示すると、以下の図3になる。

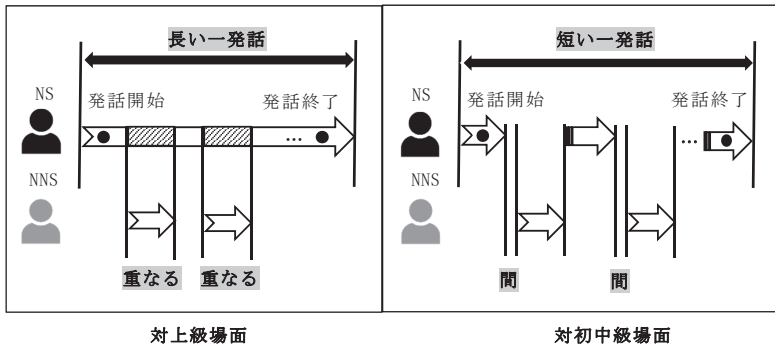


図3 接触経験の多いNSの一発話

以上のことから、NSは、普段NNSと接触経験を重ねることによって、NNSの日本語能力に応じて一発話をより柔軟かつ効果的に調整することを学習していることが示唆される。接触場面におけるNSのフォリナー・トークは、会話参加者のNSの接触経験とNNSの日本語能力によって動的に変わるものとして捉えられると言える。

NSの一発話の調整にNSの接触経験とNNSの日本語能力が与える影響を明らかにするためには、調査協力者の数を増やしてデータを充実させる必要がある。また、本稿はNSの一発話の「長さ」と「話者交替」に

注目したが、今後は、NSが行うそれ以外の発話調整方略についても調査・分析したいと考える。

参考文献

- 1) 宇佐美 まゆみ (2015) 『改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese : BTSJ)』 宇佐美まゆみ研究室
- 2) 大石 初太郎 (1971) 『話しことば論』 秀英出版
- 3) 小磯 花絵 (2008) 「音声談話における発話の終了性を備えた単位に関する一考察」 串田 秀也・定延 利之・伝 康晴 編 『「単位」としての文と発話』 95-131, ひつじ書房
- 4) 小松 奈々 (2015) 「意見交換会話における日本語中級非母語話者と母語話者の会話参加：超上級接触場面との比較から」 『言語文化と日本語教育』 48/49合併号, 1-10
- 5) 坂本 正・小塚 操・架谷 眞知子・児崎 秋江・稲葉 みどり・原田 知恵子 (1989) 「『日本語のフォリナー・トーク』に対する日本語学習者の反応」 『日本語教育』 69, 121-146
- 6) H. サックス・E. A. シェグロフ・G. ジェファソン (2010) 西阪 仰 [訳] 「会話のための順番交替の組織 - 最も単純な体系的記述」 『会話分析基本論集 - 順番交替と修復の組織』 世界思想社, 5-153 (=Sacks, H., Schegloff, E. A. & Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50(4) : 696-735.)
- 7) スクータリデス・アリーナ (1981) 「外国人の日本語の実態：(3) 日本語におけるフォリナー・トーク」 『日本語教育』 45, 53-62
- 8) 早川 治子 (2001) 「日本語中上級における教師発話の分析 (2) : 経験者と実習生の比較」 『文学部紀要』 文教大学文学部15(1),

55-68

- 9) 丸山 岳彦・高梨 克也・内本 清貴 (2006) 「節単位情報」『日本語話し言葉コーパスの構築法』国立国語研究所報告124, 255-322
- 10) 南 不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
- 11) 柳田 直美 (2010) 「非母語話者との接触場面において母語話者の情報やり方略に接触経験が及ぼす影響：母語話者への日本語教育支援を目指して」『日本語教育』145, 13-24
- 12) 柳田 直美 (2013) 「『やさしい日本語』と接触場面」『『やさしい日本語』は何を目指すか：多文化共生社会を実現するために』ココ出版, 79-95
- 13) 柳田 直美 (2015) 『接触場面における母語話者のコミュニケーション方略：情報やりとり方略の学習に着目して』ココ出版
- 14) 雷 雲恵 (2019) 『接触場面における日本語母語話者の言語調整ストラテジー：接触経験が及ぼす影響に着目して』文教大学言語文化研究科修士論文 (未公刊)
- 15) 雷 雲恵 (2021) 「相互行為の参加者はどのように発話のトラブルに対処するか：接触場面における日本語母語話者の「自己修復」に着目して」『言語文化研究科紀要』7, 79-101 文教大学
- 16) ロング, ダニエル (1992) 「日本語によるコミュニケーション：日本語におけるフォリナー・トークを中心に」『日本語学』11(13), 24-32
- 17) Chafe, W. (1987). Cognitive constraints on information flow. *Coherence and Grounding in Discourse: Outcome of a Symposium, Eugene, Oregon, June 1984*, John Benjamins, 21-51.
- 18) Crookes, G. (1990). The utterance, and other basic units for second language discourse analysis. *Applied Linguistics II*, 183-199.

- 19) Loban, W. (1966). *Language Ability: Grades Seven, Eight, and Nine*, Washington, DC: Government Printing Office.